53.5.2 中日新聞 八木さんの一コマ

## 波調

# 動乱期を生きた確かな足どり

ニュースをのぞけば、メーデーにちなんだ番組などにはめったにお目にかかれぬ昨今だが、一日のNHKテレビ「お達者ですか」がタイムリーな人選で、およそ敬老番組にふさわしくないメーデーを扱ったのは印象的だった。

この日のゲストは、演劇生活六十年という佐々木孝丸である。演出家の佐野碩と共同で労働歌、インタナショナルの日本語版歌詞を作ったという佐々木が当時のエピソードを語った。すると会場に集まったお年寄りの中に、大正十年の第二回メーデーに参加したという婦人がいて、インターの冒頭を若々しい声で披露する、という一幕もあった。

当然、話題は戦前の左翼運動や新劇活動を中心に進展したが、検束や弾圧などの暗い歴史にはあまりふれず、警官に着物のソデをもぎとられたのをいいことに、隣の人のまたぐらをくぐって逃げ出した話などを、ユーモラスに語っていたのは好感が持てた。音は悪いが、松井須磨子が歌う「カチューシャの歌」のレコードがかけられたのも珍しかった。

敬老番組というと、とかく昔はよかった式の回顧ものが多いが、単に昔を懐かしむというよりも、動乱の時代を生き抜いてきた老たちの、たしかな足どりを感じさせる、こうした企画もあってい。

第一回メーデーの写真や昭和期のメーデー風景、そして戦後期のフィルムなどによって、メーデーをめぐる時代と人々の推移を考えさせる三十分でもあった。

（藤）